

第3回BMIN会議報告

日時：23年1月29日（土） 13:00～17:00

場所：日本財団ビル会議室

参加：氏名	所属
足立 謙	筑波大学附属視覚特別支援学校
緒方 伸彦	福岡県立福岡高等視覚特別支援学校
喜多嶋 毅	大阪市立視覚特別支援学校
窪田 清和	福井県立盲学校
竹内 昌彦	岡山県立盲学校
寺崎 直	筑波大学附属視覚特別支援学校
戸田 賢	朝霞治療院 東洋鍼灸専門学校
前田 茂伸	福井県立盲学校
武藤 実樹	茨城県立盲学校

指田 忠司	社会福祉法人日本盲人福祉委員会
舟橋 智恵	特定非営利法人ジャパンハート
山口 和彦	国際視覚障害者援護協会
石井 靖乃	日本財団
千葉 寿夫	日本財団

緒方 昭広	AMIN 推進委員会
小野瀬 正美	AMIN 推進委員会
形井 秀一	AMIN 推進委員会
加藤 宏	AMIN 推進委員会
長岡 英司	AMIN 推進委員会
藤井 亮輔	AMIN 推進委員会
楠山 寛子	AMIN 事務局

司会）加藤宏（AMIN 推進委員会）



【会議次第】

1. 開会の挨拶

筑波技術大学 AMIN 推進委員会副委員長 形井秀一
日本財団国際協カグループグループ長 石井靖乃

2. AMIN・BMIN 活動報告

- 1) AMIN 推進委員会より報告
- 2) BMIN からの参加者より報告
 - (1) モンゴル：岡山県立盲学校 竹内昌彦
 - (2) タイ：大阪市立盲学校 喜多嶋毅

3. 現地レポートと BMIN に望むこと（ミャンマー）

- 1) 特定非営利活動法人ジャパンハート 舟橋智恵

2) BMINからの参加者より報告：茨城県立盲学校 武藤実樹

3) 質問等

4. 日本財団の視点から

日本財団国際協力グループ 千葉寿夫

休憩 (15:00~15:20)

5. AMIN・BMINの今後について(ディスカッション)

テーマ：マッサージ分野における途上国支援について課題と展望

座長：筑波技術大学 AMIN 推進委員会 長岡英司

筑波技術大学 AMIN 推進委員会 藤井亮輔

6. 閉会の挨拶

福井県立盲学校 窪田清和

【議事録】

1. 開会の挨拶および AMIN 活動報告 (形井)

2. BMINからの参加者より報告

○モンゴルでの活動報告 (竹内氏)

モンゴルへの支援を始めることになった経緯と、モンゴル盲人協会附属マッサージトレーニングセンター学校設立までの活動について報告された。補足として、AMIN 推進委員長岡教授、形井教授、加藤教授より、2008年の講習会や2010年度に行ったモンゴル教員研修、モンゴル盲人協会と AMIN と取り組んできた学校設立までの紆余曲折についての話があった。

○タイでの活動報告 (喜多嶋氏)

BMINとして、AMINの多くの活動に参加された立場から、これまでの話を教科書の執筆、カンボジアでのハプニング等も含め、タイで行ったセミナーや実技講習についての詳しい報告を行った。最後に全体的な感想として、東南アジアの視覚障害者の方々は、非常に熱心で、今後も出来ればこのような活動を続けていきたいとお話された。補足として、モンゴル講習会やタイセミナーに講師として参加した緒方伸彦氏からも、指導した生徒さん達は非常に熱心で、盲学校としても今後もアジア全体を見据えた活動というものを推進していけたらと考えていると述べた。また、AMIN 推進委員会の緒方教授からも、全体を通した総括が述べられた。

3. ミャンマーの現状と活動について紹介

○ミャンマーの現状とジャパンハートの活動について (舟橋氏)

ミャンマーの視覚障害者数や盲学校等の現状についての話と、ジャパンハートの活動について紹介された。AMINとしては、2010年8月に行われた全国セミナーに講師を派遣するなどの協力をしている。計画では3年後に36名の指導者が育成される予定であり、現在は指導者育成を目的に行っている事業であるが、3年後には、プロジェクト内容変換も検討しなくては

ならないと考えているとのこと。

○ミャンマー医療マッサージセミナーに参加して（武藤氏）

AMIN がジャパンハートと関わるようになった経緯も交え、ミャンマーで行ったセミナーについて詳しい報告を行った。参加者は、基礎学力もバラバラで、解剖学知識等もそれほどない方々が多かったため、臨床的に役に立つような内容で行ったなどセミナーの裏話や、セミナー後訪れた盲学校についても紹介した。

4. AMIN の活動について～日本財団の視点から～

日本財団として、AMIN およびマッサージ事業についてどのようにとらえているか、ということについて述べられた。

まず、医療マッサージとは何か、という点については、各国の政府が決めることであり、各国の法律や教育機関等、状況に合わせて変わるものという認識を持っている。そのため、視覚障害者による医療マッサージを社会に浸透させていくためには、盲人協会等のNGOとの協力だけでなく、教育機関、政府関係者および医療関係者と、連携することが大事。そのような意味で、政治的な活動を行うことも出来る専門団体による調整が、この分野で国際協力を行っていく上で大変重要であると認識している。

今後マッサージ事業を進めるとするならば、①マッサージ技術の移転、②解剖学等の医学知識の教授法の2つに重点を置き、かつ、政府関係者との調整等を行うことの出来る専門団体との協力が、マッサージの国際協力を成功させるために不可欠であると考えている。また、視覚障害者による医療マッサージ教育が可能となったとして、就業にすぐにつながるかどうかという点については、また別な活動が必要になるだろうとの考えを示した。

5. マッサージ支援における課題と展望（ディスカッション）

座長）AMIN 推進委員会 長岡英司・藤井亮輔

今回のディスカッションは、①各国のニーズとどのような支援が有効かについて検討、②国内の体制やどのようなフレームワークで行うことが大事なのか、という2部構成で行われた。

各国のニーズという点では、AMIN 推進委員会でアジア各国について視覚障害者マッサージの状況を発展状況によってABCランクに分けているが、それについての簡単な説明が行われた後、まずはそのうちCランクの国（ベトナム、カンボジア、ラオス、モンゴル、ミャンマー、バングラディシュ）に関して、医療マッサージの可能性について、実際にそれぞれの国に訪れた参加者より順番に意見された。それぞれの国について、現状が異なり、国の事情に合わせた支援内容である必要はあるが、視覚障害者の職業自立にマッサージは大変重要であり、これまでの経験のある日本が引き続き何らかの支援を行っていく必要がある、という事が共通の認識であることが確認された。

また、各国から毎年留学生を受け入れている国際視覚障害者援護協会の山口氏からは、日本で学んで、国家資格を取ったところで、国に帰ってもそれを活かす場所がなく、結局日本に残る人材が多いという現状が話され、今後支援するのであれば、その点についても考慮する必要があることが指摘された。

次に、では今後具体的にどのような支援をしていく事が出来るか、もしくはは

目指していくかということについて意見が出された。まず日本財団としては、現在具体的にマッサージの分野でアジアの視覚障害者を支援するという計画はない。ただし、これまで目指してきたゴールとして「医療マッサージ」を掲げてきたが、「視覚障害者の職業自立」という事をゴールとするのであれば、事業内容もこれまでのものとは異なり、技術移転、ビジネススキルトレーニング、原資の調達と、調整を行う現地NGO団体などの『支援計画パッケージ』として提案があれば、財団内で議論を始める事が出来る、と述べられた。また、AMIN推進委員会からは、来年度以降、予算がない中で出来る事は、BMINや海外とのネットワークを維持しながら、次の活動に向けて最低限の交流をしていく。予算として、可能性があるとするれば、ネットワーク維持程度の金額について、大学内で研究費を確保することは可能かもしれない。もう一つ検討していく事柄として、技大の中だけでなく、もう少し大きな枠で国内の視覚障害者関連団体全体が連携し、対途上国支援の事務局というのを据えて、日本全体で活動していくという可能性についても検討していただきたいと希望している。

国内体制についての希望として、日本を代表する盲人組織が、日本の盲人が国際協力を行う窓口となってほしいとの意見がいくつか述べられた。具体的には日本盲人福祉委員会という名が挙がり、日本盲人福祉委員会の代表として参加した指田氏（WBUAP 会長）からは、予算の獲得や機動性を考えると、それぞれの団体が独自性を活かしつつ、窓口を一本化して海外へ発信していくことが望ましいという認識でおり、AMINの中で3月までに具体的な形態について検討してくれるということなので、3月の評議委員会で話を出したいと思う、と述べた。また、BMINについてももっともっと発展させていけるように努力すべきとの意見も出され、今日具体的に議論に出なかったBランクの国々は医療マッサージを狙うことも出来るわけで、そうなればBランクがCランクをサポートするなど上手く循環していくことが可能であるとの見解が示された。また、教員の派遣などが必要な際に問い合わせが出来るなど、BMINのネットワーク、システムを整えてほしい等の要望があった。

6. 日本財団石井氏より挨拶

7. 閉会の言葉（窪田氏）

8. 司会者より一言

以上